

## イエスのことば 第 61 回

このことを知っておきなさい。もしも家の主人が、泥棒の来る時間を知っていたら、自分の家に押し入るのを許さないでしょう。あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのです。(ルカ 12 : 39~40)

## □文脈の確認

1. イエスの公生涯を起承転結の四部構成に分け、背景を理解しながら、イエスのことばを一つひとつ学んでいる。転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余
2. 前半、春から秋までの半年は、異邦人地域へ 4 回の旅行 (リトリート、退避と休息)
3. 紀元 29 年秋 10 月から冬 12 月の、約 3 か月の間に起きた出来事 (十字架刑は、紀元 30 年の春 4 月)。10 月には仮庵の祭り、12 月には宮清めの祭りがある。
4. 仮庵の祭りの後 (ルカ 10 : 1~13 : 21)
  - ① 七十人の派遣 (10 : 1~24)
  - ② ある律法学者との問答「永遠のいのちを得るためには」(10 : 25~37)
  - ③ マルタとマリアという姉妹の家にて (10 : 38~42)
  - ④ 祈りについての教え (11 : 1~13)
  - ⑤ メシア的奇跡：口をきけなくする悪霊の追い出し (11 : 14~36)
  - ⑥ あるパリサイ人の家にて：手を洗う儀式について (11 : 37~54)
  - ⑦ 弟子たちへの 9 つの教え (12 : 1~13 : 21) 弟子たち：特に、使徒たち
5. 弟子たちへの 9 つの教え (後半 4 つは群衆にも、あるいは群衆に語られる)
  - A) パリサイ人の家を出てきてから、弟子たちに。偽善に気をつけよ (ルカ 12 : 1~12)
  - B) 群衆の中からイエスへの要望をきっかけに。貪欲に注意せよ (ルカ 12 : 13~34)
  - C) 主の再臨に備えて、目を覚ましていなさい (ルカ 12 : 35~40)
  - D) 忠実なしもべでいなさい (ルカ 12 : 41~48)
  - E) メシアの初臨がイスラエルにもたらす結果 (ルカ 12 : 49~53)
  - F) 群衆にも。旧約聖書の預言により時のしるしを見るなら、イエスがメシアであると分かる (ルカ 12 : 54~59)
  - G) 群衆に。イエスについての考えを変えないなら、災難に遭う = 紀元 70 年のエルサレム陥落に巻き込まれて死ぬ (ルカ 13 : 1~9)
  - H) 会堂で (群衆に)。18 年間腰が曲がって全く伸ばすことができない女の人を安息日に治したことを通して、イスラエルが口伝律法とサタンによる束縛から解放される必要について (ルカ 13 : 10~17)
  - I) 奥義としての神の国の特徴。外面的には大きく成長して繁栄するかのように見える。しかし、そこには鳥が巣を作り、内面的にはパン種を含む (ルカ 13 : 18~21)

C) 主の再臨に備えて、目を覚ましていなさい (ルカ 12 : 35~40)1. イエスが帰って来るのを常に今か今かと待ち望む (ルカ 12 : 35~36)

35 節 腰に帯を締め、明かりをともしていなさい。

- 腰に帯を締め・・・旅立ちの準備 (出 12 : 11)、作業や応戦の準備など
- 明かりをともして・・・夜でもすぐに動けるように灯火をともしておく

36 節 主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸を開けようと、その帰りを待っている人たちのようでありなさい。

- 主人が婚礼から帰って来て戸をたたたく・・・遠国の婚約者を迎えに行った主人が帰って来るという設定
- その帰りを待っている人たち・・・その家のしもべたち。予定ではそろそろ、主人が花嫁を連れて帰って来る頃である。主人が帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸を開けてお迎えしようと、心待ちにしている。

2. 幸いなしもべたちのたとえ話 (ルカ 12 : 37~38)

37~38 節 帰って来た主人に、目を覚ましているのを見てもらえるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに言います。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばに来て給仕してくれます。主人が真夜中に帰って来ても、夜明けに帰って来ても、そのようにしているのを見てもらえるなら、そのしもべたちは幸いです。

- 目を覚ましているのを見てもらえるしもべたち・・・主人が帰って来るのを心待ちにして、いつも腰に帯をして、明かりを灯していたしもべ。
- 主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばに来て給仕してくれます・・・通常は起きないこと。幸いなしもべたちは、もう「しもべ」の立場ではなく、主人にとって友人、あるいは家族の一員となる。
- 真夜中に帰って来ても、夜明けに帰って来ても・・・主人の帰りは、メシアの再臨の第一段階 (空中再臨) = 教会の携挙 を意味する。これは全世界で同時に、瞬間的に起きるので、教会の聖徒たちが住む地域によって、真夜中 (第 2 時、21 時~0 時) であつたり、夜明け (第 3 時、0 時~3 時) であつたりする。

3. 家の主人と泥棒のたとえ話 (ルカ 12 : 39~40)

39~40 節 このことを知っておきなさい。もしも家の主人が、泥棒の来る時間を知っていたら、自分の家に押し入るのを許さないでしょう。あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのです。

- 泥棒の来る時間・・・それはわからない。だから用心しておく必要がある。教会の携挙もいつ起きるかわからない。今日かも、という緊張感が必要。

D) 忠実なしもべでいなさい (ルカ 12 : 41~48)1. ペテロの質問：先程の教えの対象は、自分たち 12 人の弟子 (使徒) なのか、それとも弟子たち皆なのか？ (ルカ 12 : 41)

41 節 そこで、ペテロが言った。「主よ。このたとえを話されたのは私たちのためですか、皆のためですか。」

- 私たちのため・・・ペテロたち 12 人の弟子たち (使徒たち) への教え
- 皆のため・・・12 人の使徒たちを含めて弟子たち全員への教え

① 先程の教えでは、イエスが帰って来る時まで目を覚まして待っていなさいという意味内容のたとえ話が語られた。ペテロは、このたとえ話が誰に向けての教えなのか、わからなくなった。というのは、自分たちは何があってもイエスと行動を共にするつもりなので、イエスがどこか遠くに行くとしたら、自分たちも当然ついて行くことになる。だからイエスの帰りを待つのは、自分たち使徒を除く、他の弟子たちなのか？

② イエスが遠くに行ってもそこには来ることができないことは、直前の仮庵の祭りで、イエスは人々に語っておられた。

「もう少しの間、わたしはあなたがたとともにいて、それから、わたしを遣わされた方のもとに行きます。あなたがたはわたしを捜しますが、見つかることはありません。わたしがいるところには来ることはできません。」(ヨハネ 7 : 33~34)

③ ペテロの質問に対するイエスの答えは、次のたとえ話で明確に示される。目をさまして待つべき者たちとは、ペテロたち 12 人の弟子 (使徒) を含めて弟子たち全員、信者は皆である。使徒たちですらイエスが行くところにはついて行けない。イエスの行先は天だからである。

2. 忠実で賢い管理人のたとえ話 (ルカ 12 : 42~44)

42~44 節 主は言われた。「では、主人によって、その家の召使いたちの上に任命され、食事時には彼らに決められた分を与える、忠実で賢い管理人とは、いったいだれでしょうか。主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見てもらえるしもべは幸いです。まことに、あなたがたに言います。主人はその人に自分の全財産を任せようになります。

- 主人・・・メシア
- その家の召使いたち・・・使徒以外の弟子たち、教会の聖徒たち
- 管理人・・・12 人の弟子（使徒）たち
- 食事時には彼らに決められた分を与える・・・霊的な食べ物である神のことばを神の啓示のとおり信者たちに伝える。これが、使徒たちの教えであり、「聖徒たちにひとたび伝えられた信仰」（ユダ 3）である。

3. 怠惰なしもべのたとえ話 (ルカ 12 : 45~46)

45~46 節 もし、そのしもべが心の中で、「主人の帰りは遅くなる」と思い、男女の召使いたちを打ちたたき、食べたり飲んだり、酒に酔ったりし始めるなら、そのしもべの主人は、予期していない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ報いを与えます。

- そのしもべ・・・42 節の管理人に任命されたしもべ
- もし・・・イエスの再臨を自分が生きている間にあると心得て、今か今かと日々待ち望む。その緊張感と切迫感が信仰生活に必要である。しかし、もし弟子たちがその緊張感と切迫感を失ったら、怠惰に陥るであろう。そして「キリストのさばきの座」で裁かれて、報奨なしとなるであろう。
- 不忠実な者たち・・・ギリシア語の原文は「アピストス」、不信者。イエスを信じておらず、救いを受けていない人たち。
- 同じ報いを与える・・・同じ原則でさばく、ということ。その原則とは、48 節で語られる「多く与えられた者は多く求められる」である。不信者の裁きでは、一人ひとりの行いに応じて裁かれるが、同じ行いでも多く与えられていた人とそうでなかった人では刑罰の軽重が違う。同様に、信者たちの裁きである「キリストのさばきの座」においても、どれだけ聖書から教えを受けていたか、イエスの再臨を知っていながら目を覚ましていたかどうか、神のみこころに従った働きをしたかどうかに応じて、報奨の有り・無しが決まる。

4. むち打たれるしもべのたとえ話 (ルカ 12 : 47~48)

47~48 節 a 主人の思いを知りながら用意もせず、その思いどおりに働きもしなかったしもべは、むちでひどく打たれます。しかし、主人の思いを知らずにいて、むち打たれるに値することをしたしもべは、少ししか打たれません。

- 主人の思いを知りながら用意もせず、その思いどおりに働きもしなかったしもべ・・・パリサイ人や律法学者たち、当時の世代の指導者たちで、イエスを信じなかった人々
- 主人の思いを知らずにいて、むち打たれるに値することをしたしもべ・・・聖書に記された神のことばを知る機会がなかった不信者
- 少ししか打たれません・・・むち打たれる、すなわち刑罰を受けることは免れないが、その打たれ方は少力で済む。
- (適用) 福音を知らなかったという無知は、神のさばきにおいて無罪放免の理由にはならない。不信者に対する神のさばきは、一人ひとりの行い、犯した具体的な罪によってさばかれるからである。

さばきの原則 (48 節 b)

48 節 b **多く与えられた者はみな、多くを求められ、多く任された者は、さらに多くを要求されます。**

- この原則は、不信者だけではなく、信者にも適用される共通の原則である。
- また、ユダヤ人だけでなく、異邦人にも適用される一般原則である。福音を一度も聞いたことのない不信者と、聞いたけれども拒否した不信者とでは、死後のさばきに軽重がある。